東京新聞記事（こちら特報部）

ニュースの追跡

審査員問題

年齢クルクル 検察審査 怪

足し忘れ 30.9 再計算 33.91 基準変更 34.55 ←前回と同じ

小沢一郎民主党元代表が15日、東京第五検察審査会の起訴議決を「無効」とする訴えを起こした。この訴えを斟酌する以前に、今回の議決には「ミソ」が付いている。審査員の平均年齢だ。公表された数字が一転二転。「単純ミス」という検審事務局の説明に「意図的な操作」といぶかる声も。いったい何があったのか。

（加藤裕治、篠ケ瀬祐司）

「小学生のような間違いと批判されている。返す言葉もない」。広報を担当する検審事務局の職員は平身低頭する。現在、公表されている審査員の平均年齢は次の通りだという。

まず、四日に公表された三〇・九歳。ある職員が電卓をたたいたのだが、その際、三十七歳の審査員を足し忘れ、十人分の合計年齢を十一人で割ってしまった。ほかの職員は点検しなかった。

だが、この年齢が「若過ぎる」と、世間から疑問の声が上がった。

そこで検審は再計算を試みる。ここで足し忘れが見つかった。さらに十人の合計年齢も間違っていたと分かった。ある人は就任時点、ある人は任期終了時点の年齢を拾っていた。十二日夕に三三・九一歳と訂正した。

さらに迷走は続く。再訂正は翌十三日夕。今度は三四・五五歳になったのだ。その理由は―。

十二日の平均年齢は従来通り、審査員就任時の年齢が基準。しかし、審査員は三カ月ごとに半数が入れ替わり、基準日が二つになる。報道機関から「（基準日が一つになるよう）議決時点の年齢を」と要望があった。

そこで基準を議決時点にすると、さらに平均年齢は上昇。就任時を基準にしていた理由を尋ねると「なぜと言われても…」（担当者）。ちなみに計算上では、就任後から議決時点までに議決した十一人中、七人が誕生日を迎えたことになる。

ところで今年四月にあった一回目の起訴相当議決。審査員の平均年齢を議決時点で計算してもらうと、再訂正とまったく同じ三四・五五歳。「偶然です！　複数の職員で計算した。数字は間違っていない」（担当者）

この際、審査員個々の年齢を公表した方がよいふうにみえる。それができない理由を担当者は「検審制度は非公開が前提。審査員への不当な働き掛けを防ぐ点からも個人情報は出せない」と説明する。平均年齢を公表したのも「マスコミから要望が強かったため」の特例的な扱いという。

ミスは誰にでもある。審査員の平均年齢を議決時点で計算してもらうと、再訂正とまったく同じ三四・五五歳。「偶然です！　複数の職員で計算した。数字は間違っていない」（担当者）

この際、審査員個々の年齢を公表した方がよいふうにみえる。それができない理由を担当者は「検審制度は非公開が前提。審査員への不当な働き掛けを防ぐ点からも個人情報は出せない」と説明する。平均年齢を公表したのも「マスコミから要望が強かったため」の特例的な扱いという。

ミスは誰にでもある。が、今回は「単純ミス」で済まされない。ミスが審査会自体の信頼性に直結してくるからだ。

すでにインターネット上では「存在しない審査員で架空議決をした」「偽装工作」などと「謀略説」が渦巻いている。

ジャーナリストの江川紹子さんは「算数だけでなく、ほかのこともミスが多いのでは、と心配になってしまう」と話す。

一回目と二回目の議決の平均年齢が同じことも「確率としてゼロではないだろうが、にわかに信じられない」と厳しい。

「審査員個々の年齢くらい公表すればいい。東京都内の三十三歳の人』で、個人が特定されるとは思えない。職業も学生とか有職者という程度は出した方がいい」

江川さんは情報公開の重要性をこう強調した。

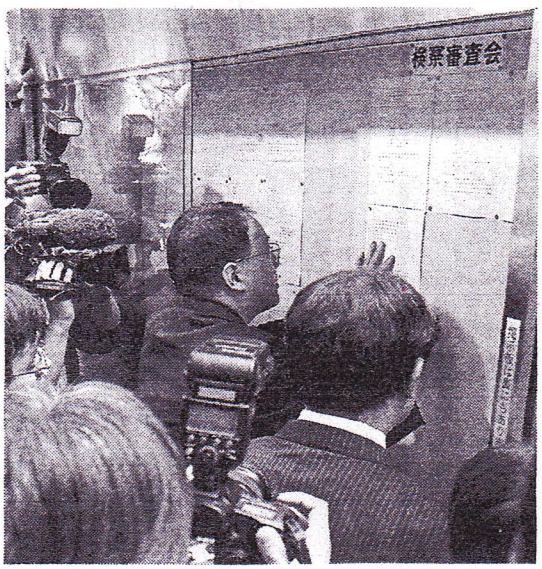
「審査会の権限と影響は大きい。できる限り、情報公開することが議決の信頼性向上につながる」

再訂正までの経緯

①(37歳の人を足し忘れ、残り10人の合計340歳）÷11＝30.9（4日の発表）

②(336＋37)÷11＝33.91（10人の年齢を正しく足し、37歳の人も加えた平均年齢。12日の発表）

③平均年齢＝34.55歳（13日の発表。基準日を就任時から議決時に変更）



民主党の小沢一郎元代表について、「強制起訴すべき」との東京第五検察審査会による議決結果を張り出す職員＝今月4日、東京・霞が関で

揺らぐ信頼 架空説まで 「情報の公開を」